青森県立郷土館研究紀要 第39号，41-47，2015．3

植物学者郡場寛博士の履歴（6）東北帝国大学農科大学[1)]

山内　智[2)]

On the Record of a Botanist Dr. Kwan Koriba.（6）
The College of Agriculture，Tohoku Imperial University

Satoshi YAMAUCHI

Key words：郡場寛，植物生理学，東北帝国大学農科大学

１．はじめに

青森市出身の郡場寛博士（1882-1957）は，植物生理学・生態学の著名な植物学者である．平成 14 年に京都の自宅に保管されいた資料が一括して青森県立郷土館に寄贈された．この資料を順次整理し，郡場寛の履歴について報告してきた（山内, 2009, 2010, 2011, 2012a, 2012b, 2012c, 2013, 2014a, 2014b）．

郡場寛は，東京帝国大学理科大学，東北帝国大学農科大学，京都帝国大学等で教鞭を執っている．その後，弘前大学では第二代目学長（1954-1957）の要職に就任している．この中で東北帝国大学農科大学時代（1913-1920）については，資料不足などもあり，今まで詳しく語られることはなかった．今回当博物館に収蔵された資料や郡場寛に関わる論説・随筆等から知り得たことについて報告する．

青森県立郷土館に郡場寛資料を一括してご寄贈いただいた郡場是行氏，郡場央基氏，資料寄付にご尽力頂き、本報告についての教示・査読をいただいた弘前大学医療技術短期大学部名誉教授千葉滋男氏並びに関係各位に心から感謝する．

２．東京帝国大学と東北帝国大学農科大学（札幌農学校）における植物生理学

札幌農学校は 1876 年（明治 9）に開校し，その後同校は 1907 年（明治 40）に東北帝国大学農科大学，1918 年（大正 7）に北海道帝国大学，1949 年（昭和 24）に北海道大学となった．

1908 年（明治 41），東北帝国大学農科大学にあった植物学講座を植物病理学の植物学第一講座（宮部金吾教授）と植物生理学の植物学第二講座が新設された（北海道大学, 1980；宇井, 1982）．後者の初代教授には柴田佳太が赴任（1908-1910）し，続いて大野直枝（1910-1913），郡場寛（1913-1920）と受け継がれた．いずれも東京帝国大学理学部植物学教室の出身で同大学植物学第二講座初代教授三好学（1862-1939）の門下生である．当時の日本の植物学研究は東京帝国大学理学部植物学教室が中心となって行っていた．なお，柴田佳太（1877-1949）と大野直枝（1875-1913）は東京帝国大学の同級生である．両者は当時，三好学も学んだ近代植物生理学の創設者であるドイツのライプチヒ大学ペファー教授の元に時期は異なるが私費留学し，最新の植物学を修得している．同じく郡場寛も公費留学生として欧米に留学したが同教授の他界により葬儀に参列することになり，学ぶ願いは叶わなかった（増田，1997；山内，2011）．『東京帝国大学にはじまる植物生理学の伝統は，ペファーの流れを汲むものが主流』（増田，1997）で，東北帝国大学農科大学植物学第二講座にもこの三人の教授陣がペファーの流れを同講座に汲み入れた．

東京帝国大学と東北帝国大学農科大学（札幌農学校）との植物研究の関係は古く，植物学者として著名な札幌農学校第二期生である宮部金吾（1860-1951）は，1881 年（明治 14）7 月札幌農学校卒業し開拓使御用係を拝命したが，同年 11 月に東京大學（明治 10 年東京大學開校，明治 19 年東京帝国大学改称）での植物学専修を命じられ，客分として当時の矢田部良吉の下で 2 年間研究に従事した．宮部金吾は 1883 年 7 月には研修を終えて札幌農学校助教に就任した（蝦名，2011）．東京帝国大学理学部植物學教室沿革（小倉，1940）によると，当時の東京大學での宮部金吾の所属は明治 14，15 年度の生物学科学生の欄に『其他　宮部金吾（植物學）』となっており，上記のように客分として在籍していたことを裏付けている．宮部金吾にとって東京帝国大学は植物学を学んだ母校であり，後輩の新進気鋭の植物学者を東北帝国大学農科大学の植物学第二講座に３代続けて迎えたことも納得できる．

３．就任から退任までの経緯

郡場寛の東北帝国大学農科大学への就任から退任まで

1）青森県の自然誌に関する調査研究（27），郡場寛博士コレクションに関する調査研究（9）

2）青森県立郷土館 主任学芸主査（〒 030-0802 青森市本町 2 丁目 8-14）

表 1．東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学赴任時の辞令等一覧

発令年月日	内　　容	発令機関	職　　名
大正2年11月21日	東北帝国大学農科大学講師嘱託	東北帝国大学農科大学	理学博士
大正2年11月30日	東京帝国大学理科大学副手嘱託解く	東京帝国大学	理学博士
大正2年11月30日	手当支給額通知	東北帝国大学農科大学	講師，理学博士
大正2年11月30日	東北帝国大学農科大学植物学第二講座属する職務擔任	東北帝国大学	東北帝国大学農科大学講師理学博士
大正4年3月31日	手当支給通知	東北帝国大学農科大学	講師，理学博士
大正4年8月9日	東北帝国大学農科大学講師嘱託解く	東北帝国大学農科大学	理学博士
大正4年8月9日	任東北帝国大学農科大学教授，敘高等官六等	内閣総理大臣	理学博士
大正4年8月9日	東北帝国大学農科大学植物学第二講座擔任	文部省	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正4年8月9日	給与等級通知	文部省	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正4年9月10日	敘正七位	宮内大臣	理学博士
大正5年3月30日	手当支給通知	東北帝国大学	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正6年3月30日	手当支給通知	東北帝国大学	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正6年9月24日	歸省許可	東北帝国大学農科大学長	教授
大正6年10月11日	除服出仕	東北帝国大学農科大学	教授理学博士
大正6年12月27日	東北帝国大学農科大学植物学第二講座擔任免す	文部省	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正6年12月28日	京都帝国大学理科大学生物学教室開設設計顧問嘱託	京都帝国大学	東北帝国大学農科大学教授理学博士
大正7年1月31日	手当支給通知	京都帝国大学	理科大学生物学教室開設設計顧問理学博士
大正7年2月1日	米国，英国，伊国，瑞西国留学	文部大臣	東北帝国大学農科学教授理学博士
大正7年11月5日	留学先追加（佛国），学資支給	文部大臣	外国留学生
大正8年4月1日	給与等級通知	文部省	北海道帝国大学教授理学博士
大正9年8月20日	京都帝国大学理学部生物学教室開設設計顧問嘱託解く	京都帝国大学	理学部生物学教室設計顧問
大正9年8月20日	任京都帝国大学教授，敘高等官五等	内閣総理大臣	北海道帝国大学教授　正七位

＊辞令等は青森県立郷土館郡場寛博士コレクション蔵

の経緯を，辞令等から考察する（表 1）．郡場寛が 1913 年（大正 2）11 月 21 日に東北帝国大学農科大学名で同大学の講師の嘱託を受けている（図 1）．この嘱託を受けて同年 11 月 30 日には東京帝国大学理科大学副手の嘱託が東京帝国大学名で解かれている．更に同年月日付けで東北帝国大学名で植物学第二講座の職務擔任（図 2）と同農科大学名で手当ての支給通知を受けている．この手当支給通知によると『手當年額金千四百圓』でその内訳は『植物學第二講座擔任手當金七百圓，講座外授業擔任手當金七百圓』で，担当する講座と講座外に分けて支

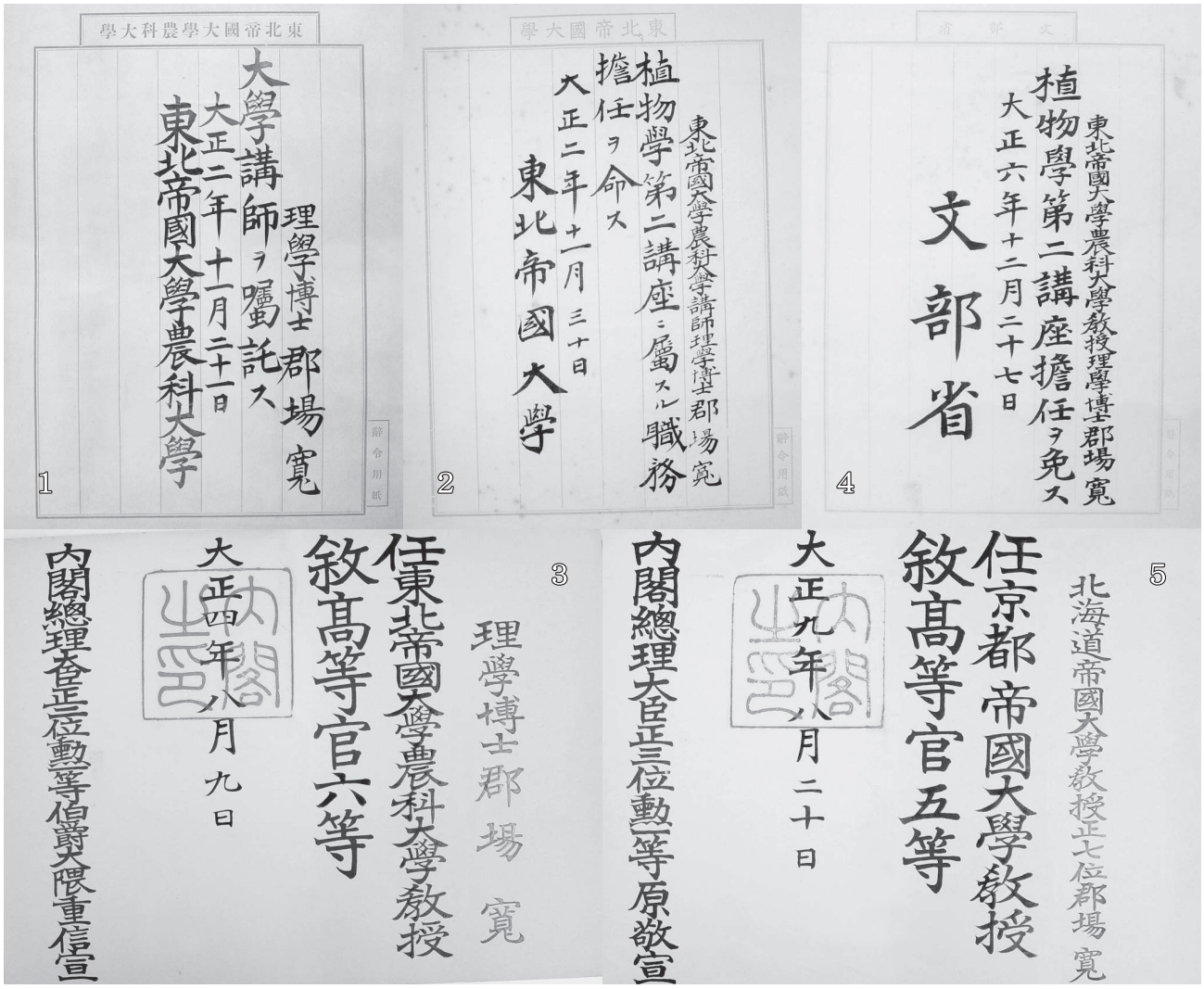

図　**1**．東北帝国大学農科大学講師嘱託　辞令　　**2**．東北帝国大学農科大学植物学第二講座職務僫任　辞令
3．任東北帝国大学農科大学教授　辞令　　**4**．東北帝国大学農科大学植物学第二講座退任　辞令
5　任京都帝国大学教授　辞令

給されている．就任辞令等の年月日からも両帝国大学で連絡調整が大変うまく出来ていることが伺われる．1915年（大正 4）には，内閣総理大臣名で講師から教授に昇任した（図 3）．その後，1917 年（大正 6）12 月 27 日に『植物学第二講座擔任ヲ免ス』（図 4）により翌日京都帝国大学理科大学生物学教室開設設計顧問の嘱託を受けている．職名は東北帝国大学農科大学教授である．この時点で同大学での実質的な職務はなくなった．しかし郡場寛が欧米に留学した 1918 年（大正 7）から京都帝国大学教授の就任（図 5）した 1920 年（大正 9）8 月 20 日までの期間の職名は東北帝国大学農科大学教授，北海道帝国大学教授である．以上の事から講座で学生を指導した期間は 4 年 1 ヶ月，就任期間は 6 年 9 ヶ月である．よって東北帝国大学農科大学及び北海道帝国大学の就任期間は 1913 年（大正 2）11 月 21 日から 1920 年（大正 9）8 月 20 日とするのが妥当である．

郡場寛が東北帝国大学農科大学植物学第二講座に赴任する事になった理由の明細は不明である．前任者である大野直枝が，初代教授の柴田佳太の後任として留学先のドイツのライプチヒ大学から帰国後，東北帝国大学農科大学の教授に就任した．しかし『札幌に永住し，研究と教育に専心しようとした大野は不幸にして病を得，わずか 38 歳の若さで亡くなった』（増田, 1999）．このため，当時，東京帝国大学理科大学副手であった郡場寛が東北帝国大学農科大学に講師として急遽選考を経て赴任したと考えられる．なお，東北帝国大学農科大学に赴任した 1913（大正 2）年度（大正 2 年 9 月～同 3 年 7 月）の東京帝国大学理科大学植物学教室職員は第二講座教授三好学，助教授柴田佳太，講師服部廣太郎・早田文蔵・牧野富太郎，嘱託小泉源一・川上瀧彌，助手松田定久，副手郡場寛，桑田義備，川村清一，日比野信一で構成されていた．このうち郡場寛が明治 42 年 10 月 5 日に副手の嘱託を受け，他の副手より就任期間が長い（小倉, 1940）．このことも選考の理由の一つと考えられる．

この選考は短期間で行われた．大野直枝が病気療養ため 1913 年（大正２）9 月 25 日札幌を出発し，療養先の

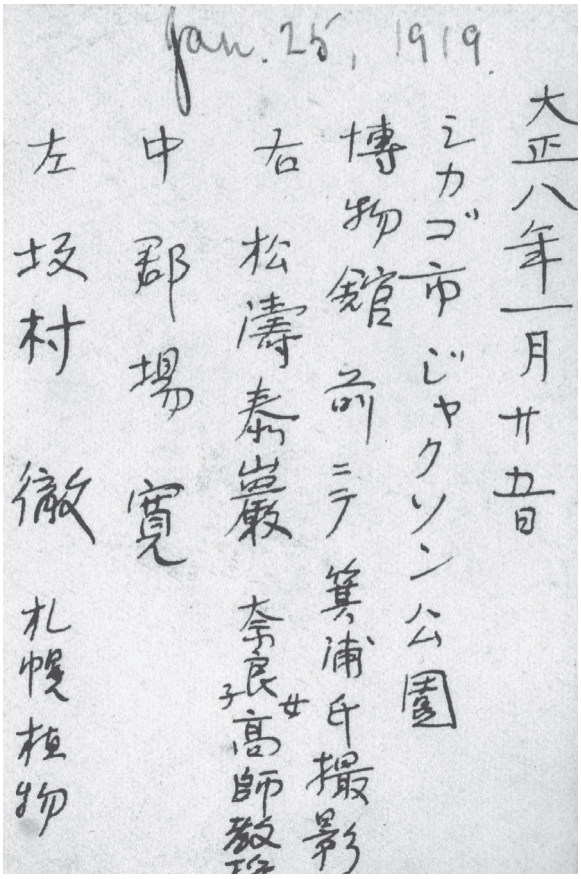

図 6．シカゴ市ジャクソン公園博物館前にて（同裏書き）

兵庫県西須磨で同年 10 月 19 日に逝去した（増田, 2002）．郡場寛が東北帝国大学農科大学講師の辞令を同年 11 月 21 日付けで受けている．人事辞令の手続き等もあり，選考は一ヶ月足らずで実施されたことになる．その理由は不明であるが，大学での講義も始まっており早急の選考が急務であった可能性が高い．

就任・退任についての明細を記録した郡場寛の書簡等は見つかっていないが，東北帝国大学農科大学在任中の門弟である並河功京都大学名誉教授によると，就任について『郡場先生が一流の人材という選考にのって就任された』（並河， 1970）．また，『宮部先生が京都に来られましたときのお話ですが“そのとき無理を云って郡場君に来てもらったが，学会は勿論，京大のためにも北大のためにもなった”と話しておられました』（並河, 1958），また退任については『京都の生物教室に来られましたのは，大幸先生の御力が大きかったようで，北大に来られまして，郡場先生と宮部先生にお話をされて招かれた』（並河， 1958）と回想している．郡場寛が北海道帝国大学から京都帝国大学に転出したのは宮部金吾と相談の上であったことが伺える．

東北帝国大学農科大学植物第二講座は郡場寛が 1917 年（大正 6）12 月に講座を退任後，同講座は 1918 年（大正 7）8 月に伊藤誠哉（菌学）が担当になった．また，1920 年（大正 9）5 月の職員構成によると『植物生理学・細胞学（外国留学中）助教授　坂村徹』（北海道大学, 1980）とも記述されている．同年 9 月に植物第三講座が設置され伊藤誠哉が担当し，植物第二講座は 1921 年（大正 10）12 月から板村徹が担当になった．北海道帝国大学の植物生理学は郡場寛転出後は板村徹が継承した．その後植物第二講座は作物生理学講座となる（北海道大学, 1980）．板村徹（1888-1980）は小麦の染色体数を確定したことなどで世界的に著名な研究者である．郡場寛の欧米留学（1918-1920）の時期と板村徹の外国留学の時期が被っており，郡場寛は 1919 年（大正 8）1 月 20 日から同年 5 月 18 日まで米国シカゴ市に滞在していたことが確認されている（山内， 2011）．同年 1 月 25 日，シカゴ市ジャクソン公園の博物館前で一緒に写った写真（図 6）が残されている．郡場寛，板村徹，松濤泰巖（奈良女子高等師範学校教授）の 3 人が写っている．板村徹には『札幌植物』と所属が記述されている．郡場寛とは面識もあり，異国の地での再会でとても心強かったことと思われる．どのような会話を交わしたのか興味深いが，その内容は残されていない．

4．講義及び調査研究など

北大百年史（北海道大学， 1982）によると，郡場寛が在職していた当時の東北帝国大学農科大学では，大学本科は農学科，畜産学科，農芸化学科，林学科の 4 科で構

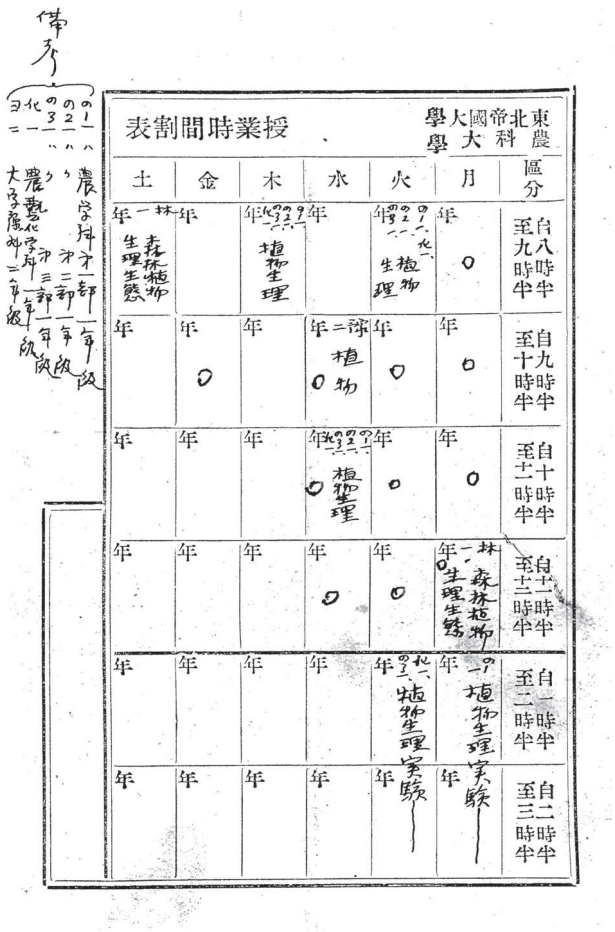

図 7．東北帝国大学農科大学授業時間割

成されていたが，勤務初年の 1913 年（大正 2）に農科大学規則が改正され，農学科を三部制，畜産科を二部とした．このうち郡場寛が受け持った農学科は第一部に農業生産，第二部に農業経済，第三部に農業生物の分野に分けた．郡場寛担当の講座は農学科第三部植物学第二講座であった．因みに植物学第一講座の担当は宮部金吾である．大学院も設置されていたが 1913 年（大正 2）に最初に入学した 3 名の中には，郡場寛の後任となる坂村徹がいた．大学豫科修学年限が 3 年で修学科目の中に植物学が含まれていた（北海道大学, 1982）．

さて，青森県立郷土館郡場寛博士コレクションの中に「東北帝国大学農科大學授業時間割表」（図 7）がある．郡場寛の講義の時間割である．月曜日から土曜日までで昼休み 1 時間を挟んで，午前八時半から 1 時間単位で 4 時間，午後は一時半から同じく 1 時間単位で 2 時間，合計 1 日 6 時間で構成されている．備考に授業した学年が記載されている，大学豫科 2 年級には植物を週 1 時間，農学科第一部 1 年級，同第二部 1 年級，同第三部 1 年級には植物生理を各々週 3 時間，農芸化学科にも植物生理を同じく週 3 時間，林学科 1 年級の森林植物生理生態を週 2 時間講義していた．植物生理実験は午後に 2 時間連続で月曜日に農学科第一部 1 年級，火曜日に同科第三部 1 年級と農芸化学科 1 年級が受講していた．併せて週 10 時間担当していた．なお，時間割にある〇印が何を意味するかは不明である．

郡場寛の札幌在住中の事について並河功（1970）が回想している．それによると研究室には植物の屈曲をみるためにオニノヤマガラの芋つきをいろんな姿勢に置いていた，更に講義は『多くの学生に新鮮な空気を吹きこまれたものでした』，担当していた学科の学生だけでなく『植物学にあまり関係のない畜産科の学生なども聴きにきて』いたが，その聴講理由は『ものの考え方，問題の取扱い方について大いに啓発される』ことであった．

専攻として郡場寛から指導を受けた学生は，竹内叔雄，渡瀬次郎，並河功，木原均などで，それぞれ著名な研究者になっている．学生を連れて『大学構内の森とか，植物園などに行って教えを受けたものです．日帰りの遠足では手稲山とか，幌向，対雁などの泥炭地の植物観察』（並河，1970）を行った．また並河功（1958）によると『先生は御元気で盛に泥炭地や山を歩かれた．』ヨシ原の排水溝に飛込んで木原均と一緒に引き上げたことや手稲山で崖から飛び降りたことなど当時の調査の様子を語っている．また郡場寛博士コレクションの中に，『大正 5 年夏，夕張岳頂上ニテ』と裏書きされた写真がある（図 8）．8 人の集合写真で，荷物の他に胴乱が見られ，目的は植物の調査であることが伺える．

この期間に，次の 1 編の論文を発表していた．1914 年（大正 3）3 月，東京帝国大学理科大学紀要に学位論文であるネジバナの研究が”Mechanisch-physiologische Studien über die Drehung der *Spiranthes*-Ähre.”の表題で掲載された．本論文は東北帝国大学農科大學に赴任する前から準備していたと思われる．本文 167 頁，図版 71 点と今までのネジバナの研究をまとめた論文である．指導教官であった東京帝国大学理科大学教授三好学もとても喜ばれたことと思う．

東北帝国大学農科大学の赴任について，別の面で興味ある事実がある．郡場寛が植物学を志し採集を始めたのは，青森県立第一尋常中学校在学中（1895-1990）で，同中学校に赴任した札幌農学校出身の平塚直治教諭の指導によるところが大きい．中澤潤弘前大学名誉教授によると『當時札幌農学校出身の平塚直治先生が就任して来られ，その熱心な指導は生徒達に大きな感化力を及ぼしたが，丁度四年生になたばかりの先生も他の同級生 6 名と平塚先生に従って植物採集を始められた』（中澤, 1953）．

平塚直治の業績等まとめた山本美穂子（2007）によると，平塚直治（1873-1946）は，札幌農学予科から同校農学科に進学し 1896 年 7 月 7 日に 14 期生総代として卒業した．在学中は宮部金吾の指導の下，銹菌の研究を行った宮部金吾門下生である．1896 年（明治 29）10 月 8 日，青森県立第一尋常中学校に教諭として赴任した．同校では博物担当で動物学，植物学，化学，地文学，生理学，英語の 6 科目であった．当時同校には，平塚直治が札幌農学校本科生の時の助教授平野他喜松（数学・物理担当）が教諭として先に赴任し，良き相談相手となり教

図 8．大正 5 年夏　夕張岳山頂にて

諭生活を支え合った．同年 12 月には東奥義塾に 10 期生の村越銃之輔が就任している．平塚直治は 1898 年(明治 31)10 月には沖縄県尋常中学校に転出している．短期間ではあったが郡場寛に多大な影響を与えその後の研究生活の恩師でもある．東北帝国大学農科大學は郡場寛の恩師である平塚直治の母校でもあり，平塚直治の恩師宮部金吾と職場を一緒にすることになった．また郡場寛にとって宮部金吾は東京帝国大学での先輩でもある．

郡場寛は植物学者宮部金吾に対して感謝と尊敬の念を常に抱いていたと思われる．宮部金吾宛ての三通の書簡が北海道大学に保管されている（秋月， 2010）．一つは毛筆巻紙で 1918 年（大正 7）2 月 13 日付け『小生の京都大学嘱託における俸給につきご配慮いただき感謝します』と書かれている．この年の前年，大正 6 年 12 月 28 日付で京都帝国大学から京都帝国大学理科大学生物学教室開設設計顧問の委託の辞令受け，大正 7 年 1 月 31 日付で『手當一箇月金四拾七圓給與』の手当支給通知が出ていて，この件に関する礼状と考えられる．なお，添え書きに同年 2 月 9 日に帰省中と書かれ青森市栄町の住所になっているが，同年 3 月 21 日には横浜港から欧米留学に出発しており，留学前に一時帰省していた時の投函と思われる．また，大正？年 9 月 17 日付（鹿児島駅）絵葉書には薩摩川内川中流で発見されたカワゴケソウ科の一種を見学に行ったことが, 昭和 21 年 2 月 15 日付(京都上京区）の葉書は，宮部金吾の文化勲章のお祝いが述べられ，更に『11 日に昭南より無事大竹港へ帰着』とも書かれている．2 月 13 日に帰宅（山内, 2010）し，その後 2 日後には宮部金吾に無事帰還したことの書簡を出しており，宮部金吾に対して敬意を称していた事を裏付ける書簡であある．

5．生活など

東北帝国大学農科大学に赴任したときの，住居等については札幌市内であること以外，住所等は不明である．郡場寛が当時の燃料事情について『私の札幌時代（1913-1917）でも，すでにマキがそろそろ不自由で，石炭の方が経済でした，1 トン 13 円位だったでしょう』と回想している（木原, 1962）．

郡場寛は，当時植物調査で道内の林野や山岳地帯を隈無く踏破していたが，趣味として冬はスキーを楽しんでいた．スキーが大変堪能な当時の学生木原均や岡見聞多について『此両君は僕の教えた学生であるがスキーは僕の先生である』（郡場， 1966）とスキーを習得したことを回想している．1918 年（大正 7）2 月『札幌からご郷里に引きあげられた時，八甲田山でスキーをやると来信があったのには，みんなが大変心配したものです．・・・そこで当時のスキーヤーのトップレベルにいた木原均君と岡見聞多君の二人が急行して，三人でパーティーを組み，心ゆくまで滑られたということでした』（並河, 1970）. 同年 2 月 27 日案内人を含めて 5 名で出発したが,

悪天候のため同年3月3日無事青森市栄町の実家に到着した．この様子は地元の新聞東奥日報（大正7年3月5日）に『吹雪を犯して八甲田横断』と報じられた．ただ，吹雪の日は両親が経営していた酸ヶ湯温泉に宿泊していた．この後同新聞に7回連載で「八甲田山スキー跋渉記」を掲載している．

６．おわりに

郡場寛が東北帝国大学農科大学及び北海道帝国大学の赴任期間は短期で，その資料は少なくまとまった報告もなかった．しかし，今回の調査から判ったことは，郡場寛にとって北海道内を調査で探索し，充実した研究期間でもあり，更に木原均や並河功など多くの著名な研究者を育てることができた．両者はその後京都帝国大学で教鞭に立つことになる．当時の郡場寛門下生は先生から研究者としての多大な感化を受けて，多くの分野で活躍した．

引用文献

秋月俊幸　編（2010）書簡からみた宮部金吾．北海道大学出版会．310pp.

宇井格生(1982)北大農学部の植物学と北海道．北大百年史通説，pp.881-892.

蝦名賢造（2011）札幌農学校（復刻版）.「札幌農学校」復刻刊行会，467pp.

小倉謙（1940）東京帝国大学理学部植物學教室沿革．東京帝国大学理学部植物學教室，342pp.

木原均編（1962）生物学閑話，233pp. 廣川書店，東京．

Koriba, K.（1914）Mechanisch-physiologische Studien über die Drehung der *Spiranthes*-Ähre. *Journ. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ*., 36(3): 1-180. pls.1-7.

郡場寛（1966）八甲田山スキー跋渉記．木原均編，生物学閑話第Ⅱ集，pp.255-260.

中澤潤（1953）青森県出身の生物学者（２）郡場寛先生．進化,5(2): 18-20.

並河功（1958）郡場寛先生をしのぶ会における追想談，並河功名誉教授．郡場寛先生遺稿集，pp.287-288.

並河功（1970）札幌時代の郡場先生．木原均編，生物学閑話第Ⅳ集，pp.323-326.

北海道大学（1980）農学部．北大百年史部局史，pp.857-1014.

北海道大学（1982）北海道帝国大学農科大学．北大百年史通説，pp.165-207.

増田芳雄（1997)板村徹先生の植物生理学．人間環境科学，6: 140-142.

増田芳雄（1999)20 世紀初頭のライブチヒ，ー植物学者大野直枝のドイツ日記ー．人間環境科学，8: 9-38.

増田芳雄（2002)大野直枝の人と業績．195pp．学会出版センター．東京．

山内智（2009）植物学者郡場寛博士の履歴．青森県立郷土館研究紀要，(33): 28-34..

山内智（2010）植物学者郡場寛博士の履歴（2）昭南植物園．青森県立郷土館研究紀要，(34): 19-26.

山内智（2011）植物学者郡場寛博士の履歴（3）1918-1920年の国外留学．青森県立郷土館研究紀要，(35): 31-36.

山内智（2012a）植物学者郡場寛先生の履歴．あおもり長寿セミナー，(8): 1-2.

山内智（2012b）生誕 130 年記念植物学者郡場寛によせて(上)．東奥日報，(43598): 10.

山内智（2012c）生誕 130 年記念植物学者郡場寛によせて(下)．東奥日報，(43599): 10.

山内智（2013）郡場寛の生涯．東奥文化，(84): 5-14.

山内智（2014a）植物学者郡場寛博士の履歴（4）著作目録．青森県立郷土館研究紀要，(38): 15-20.

山内智（2014b）植物学者郡場寛博士の履歴（5）昭南植物園（2）．青森県立郷土館研究紀要，(38): 21-26.

山本美穂子（2007）平塚直治受講ノート（西信子・西安信氏寄贈）をめぐってー札幌農学校 14 期生の学業史ー．北海道大学大学文書館年報，2: 1-28.